

記者 「原爆が落ちる前、戦時中はどんな生活を送っていましたか？」

築城さん 「全寮制だったもんですから、だいたいもう長崎市に住んでいたんですけども、寮に入
ってですね、寮生活を送っておったんですが、とにかく食べ物がないし、自分の家だ
ったら親がやりくりしたりしてなんとかその食べ物もなったんだろうと思うんです
けども、学生全部が全寮制の中では（食べ物の）やりくりができない訳ですね。それ
でもうやっぱりひもじくてたまらんやったですね。それから授業がもう全くなくて、
工場のほうにずっと通っておった。具体的にはですね、ご飯はもうまったくなくて。
カボチャが主食ですね、カボチャも1個じゃなくて3分の1ぐらいが主食で、おつゆ
も味もない、なんかの葉っぱが入っているようなぐらいで、とても若い男がそれだけ
では満足できなかったというような状態でした」

記者 「8月9日、朝から原爆が落ちるまでの間はどうか過ごしていましたか？」

築城さん 「その週は夜勤だったもんですから、夜中に働いて昼間は寮で寝るだけだったんですね。
ちょうど前の晩、ずっと一晩中働いて、んで朝9日の7時ぐらいですかね、やっと工
場を出て、寮に帰ってきて、それでまた少しばかりの食事をしてもうすぐに寝たんで
す。ずっと寝とったんですね」

記者 「そのあとはどうなりましたか？」

築城さん 「途中で空襲警報が発令されて、もう本当は防空ごうに行かなきゃいけなかったんです
けども、もう1日何回も空襲警報ありますから、防空ごうに1度1度行っと思ったんじ
ゃ、睡眠不足になるんですね、それでもう実際に空襲が始まってから逃げようとい
うことで、空襲警報が鳴ったその時に起こされて、洋服を着て、洋服って夏ですからシ
ャツを着てズボンもはいて、ゲートルも巻いて、んで靴とかあの肩から提げる袋とか
そんなのはそばに置いて、寝とったんですよ。そしたらしばらくしてまた一寝入りし
た時に空襲警報解除になってまた起こされて、もう普通ならまあ「あーよかった」
って言って、また夏姿になって寝るところだったんですけども、運ですね一、その日
に限ってもう眠くてしょうがなくて、また洋服を着たり脱いだりするのがもう面倒だ
と思って、もうそのまままたパタッてすぐ逃げる用意をしたそのまま寝てしまった。
当時はそんなふうで空襲があつてから逃げようと思つてたから、急に爆弾がその場に
落ちるっていうことも考えられるし、少しでも破片をよけるという意味もあつたんだ
ろうと思うんですけど、夏の暑いのに布団を頭からすっぽりかぶって寝とったん
ですよ。それがまた運が良くて、手はもうこうしてケロイドがあるんですけども、顔には
ケロイドがなくてですね。布団のおかげで」

記者 「原爆が落ちた瞬間はどんな感じだった？」

築城さん 「夢をみとったんですけどもね、急にガガガーっていう音ではっと起こされた時に身体
が吹き飛ばされてましたね。そのまま同じ部屋の中だったんですけどもどこかにぶつ
けられて立ち上がって、隣の部屋に爆弾が落ちたとばかり思つとったんですよ。ん
で、まあ自分はまだ生きてるというふうなことはすぐに感じて、だけれどももう部屋

の中は真っ暗ですね、もうどこにどう逃げていいかわからんでウロウロしとったら真っ暗って言っても1メートルぐらいはうっすらとこの辺は見えてとったんですけども、そこに隣に寝とった友達と顔と顔が合わさったもんですから、びっくりしましたねー、頭の上から足の先まで真っ赤になってるんですよ。やっぱり第1印象は赤鬼っていう感じだったですね。わー、おまえやられとるぞって言ったら、何のことはないこっちも真っ赤になっとったんじゃそうで、むこうの人がそう言うんですね。そう言われてみると血があちこち出ているのがわかった。もうてっきり、爆弾の破片でやられて血が出てるって思い込んだっただけなんです。実はあとでゆっくりしてから考えたんですけど、ガラスの破片で10か所ばかりケガをして頭からも血が出てましたね。光も音も爆弾の音、なんも聞いてないんです。とにかくガガーッっていうのは家が崩れる音だったんですね。それで起こされたんですね。光も何も知らんで、防空ごうに逃げて行って、そこで防空ごうに来た人たちの話で、ぴかーっとものすごい光ったと知った。ものすごい爆弾が1発だけだったっていうこと、そういったこともそこで聞いた。やられた瞬間は全然知らなかった」

記者 「落ちたときはそれが原爆だっていうのは？」

築城さん 「全然知らなかった。原爆がこうして発明されているということも知らなかったし、3日前の広島のこと新聞で新型爆弾っていうのは読んだんですけどね。新型爆弾でなんのことも全然わからないし、もう忘れてしまったし、やられた瞬間はやっぱり隣の部屋に普通の爆弾が落ちたというふうにしかなってなかった。そしてもう2人で励まし合いながらね、逃げてどこをどう廊下を通ったような気もするんですけども、よく覚えてないんですよ。こっちでもないあっちでもないって暗い中を探りながら動きよったらやっと外に出れたんです。外に出てみるとね、少しはこう見えるようになってきて、よく外の様子を見ると家という家がみんな倒れている。そのときも原爆なんて全然思いもよらないし、新型爆弾っていうこともその瞬間はまだ気づいていないんで、爆弾がもういっぱい落ちたっていうふうに思った。原爆って確信をもったのはあれを見てからです、宣伝ビラ。アメリカ軍が後で落としてるんですね、それを知人が拾って見せてくれたんですよ」

記者 「防空ごうで見た人たちの様子について（教えてください）」

築城さん 「途中では誰にも会わなかったんですよ、防空ごうに行ってからそのもうわいわいしておったんですが、もうとにかく地獄と思いましたね。もうまともな人は1人もいないで、皮膚もみんなめっちゃめっちゃになって、鼻がとれている人、それが一番印象深かったですね。それから耳がない人、それから口がもうおちょぼ口のようになってるんですね。だいたいもう前か後ろかもわからんような状態ですね、もう人間の格好をしているだけという。もう本当にあの姿っていうのは今でもちょいちょい夢でも見たりしています。もうしょっちゅう思い出すんですね。そのとき、それはもう原爆のときには、長与まで行く間にいろんなものを見たりはしたんですけども、やっぱり一番印象

に残っているのは、防空ごうの前でのそういうたくさんの人々のおおやけどをした、みんな幽霊のようになってしまっている姿ですね。

火事になりましてね、倒れた寮も燃えてしまったんですよ、どんどん燃えてるので、やっぱり近くだったもんだから、ここにおったら危ないって言ってね、んで友人とか下級生なんか10人くらいずっと集まっとったんですけど、どこかほかの防空ごうに行こうってそこの場所を離れたんです。それからもう防空ごうの最初の場所には戻ってこなかったの、あとどうなったかわからないんですけども、おそらくあのやけどした人たちはみんな死んだんじゃないかと思えますね。まだその時は生きておったんですけどね。んで、まああちこち防空ごうに行って、どこへ行っても満員でもう入れないんですね、仕方ないのでちょっと小高いところに登って、木の陰に、まだ上は飛行機の音がするもんだから、またいつ爆弾落とされるかわからんと思って、木の陰におったんですよ。その頃からすこしずつ傷が痛み出してですね、あー、僕も大変な傷を負ってるなということを感じたりしてね」

記者 「どんな痛みでしたか？」

築城さん 「あのですね、とにかくこの痛みはもう少しあとになってからです。血が出たところやなんやがあちこち痛み出して、それはね、なんとか我慢できそうな痛みやった。ここがひどかったんですね。ここがもうね、長与に移ったあとで痛み出して、もう本当に切り落としてももらいたいような痛みで転げ回ったんですね。左腕と左足の先、外に出しておったんですね、布団から。ここに筋があるんですよ。ここから外に出しておったんですね。こうなると、こっちから原爆。ケロイド。とにかくもう耐えられんような痛みだったんですね。それからやっぱり、もうずっと後ですけど、治療してもらってやけどの薬を塗ってまた翌日（包帯を）取り替えるときにははがすときがやっぱり痛かったんですね。神経が出とったんですよ、白いそうめん、初めて神経みました。そうめんみたいなのがあって、あら？なんやろうかと思ったら、それが神経だった。ちょっとそれ（＝神経）にさわられたら、バーって痛みが来て神経だってわかったんです。そうめんみたいな感じだったんですよ。

しばらくしてから元気な連中が、元気っていうかトンネル工場におった連中がすぐ戻ってきているんですね、それでその連中が伝令やなんやらそれから消化、救護、いろんな大活躍をやっているんですよ。その連中はもう先に死んでしまったんですけどね。やっぱり放射能のせいですよ。まあとにかくその連中から伝令がきて、あちこち言って回っているんですね、（人が）固まっているところに、師範生は長与国民学校にすぐに行きなさい。そこで治療の準備ができていう伝令がきたんですよ。僕はもう長与まで歩ききらんと思ってね、そのうちに担架担いで中心部、本当は中心部もみんなやられているのに知らなかったんですね、松山付近が一番ひどいっていうことはね、おそらく誰かあそこを逃げてきた連中がおったんでしょうね、なんか聞いたんですよ、それから間もなく。いったいどこに、それでもそこが中心地とは

知らないんですね、それでも何発か落ちたに違いないと、自分が気づかなかっただけで、そう思っただけなんですけども、えらい瞬間的に何発も落としたもんだなと思ったりしながらおっただけなんですけども。まあいずれにしても中心部から担架を担いで救護隊が来るからそれに乗っていこう、僕は歩ききらんって言ったら、いや、どうも話の具合では救護隊はもう来んらしいぞと。んで、とにかくそのままおったら死ぬに違いないと、できるだけ少しでも助かってこの戦争にまた参加をしなければ日本は大変なことになるぞっていうことを言われたんですよ、友達どうして。そう言われたら仕方ない、とにかく一緒に歩いていこうと。んで、立ち上がれないところをなんとかして立ち上がって、んで、もう友達と助け合いながらよろよろよろよろして歩いていったんです。途中がまたいろいろ大変でね、今もうバス通りになっている、そのころはバス通りはなかったんですけどね、チトセピアのところをずっと、だいたい道路は今と同じ、その前は今もありますけどちょっと細い道路ですけど。まだ道路が造られているところだった。僕らはその時は細い道路を歩いてチトセピアの付近のところまで出て、電車通ってなかったんですけどね、大通りを長与のほうに向かって歩いていった。もうとにかく途中で休んだり歩いたり、途中で火事で熱くてたまらん、そばを通り抜けたらね、電信柱が倒れている通れんところをなんとかしてよけて通ったり、通っちゃ休み、歩いちゃ休みしてね、んで、なんか僕らが行っているところ、僕は知らなかったんですけども、なんかトンネル工場の横から見た時に僕が通ってるのを見て、あ、もう築城は死ぬぞってやっぱり思っただけです、その人がトンネル工場から見て。(全身) 真っ赤にしてよろよろ歩いているもんだからあ、間もなく死ぬぞって。助けてやるって言ってもみんなそうだからね、とにかくよろよろでも歩きよるから何しろそのまま歩いているのを見とったって言って。そういう話もあとで聞いたんですよ。そういうふうにしてなんとかして歩いて行って、家の倒れが少なくなっていくんですね。最初は家倒れておっただけなんですけども、今度は斜めになったり、長与に入った頃、今高田っていうところあの付近になるともう家はもうちゃんと建っておったけども瓦が飛んだりガラスが割れたりしてたんですけども、道ノ尾駅に来た時にはもう歩ききらんと思ってね、何人かで汽車に乗っていこうって言って、プラットホームで待っておった。そしたらまたあとからきた連中がもう汽車は来んぞって言って、とにかく一緒に頑張っていこうって言われてまた歩き出して、それでまあ長与に学校に着いた時がもう夜の8時ぐらいだったんですね。2時間ぐらいで歩けるところをね、そのぐらいかかって」

記者 「長与で治療はしてもらえましたか？」

築城さん 「治療する、初めてしてもらえました。ようばい菌が入らんやっただけだと思っただけですけどね、もうほとんど全身やけどの薬、特にここと(=左手) 足がひどいというので。それからガラスで切れたところを2針か3針ぐらいは縫ってもらって、そんなふうにしてもうすぐ寝ときなさいって言われて、講堂で寝たんですけど、僕はてっきり

お医者さんに治療してもらったと思っていたんですけど、あとで本を読んでも当時、長与にはお医者さんおらんやったんですね、みんな軍隊にとられてしまって、軍医として。んで、だから治療した人は誰やったんだろう、まあ少なくともなんかお医者さんの経験のある人だったんでしょね。上手にやっぱり治療はしてもらったんで、縫うのもきれいに縫ってもらったんで」

記者 「そのあとはしばらくそこにいましたか？」

築城さん 「一晩そこにおったんですけどもね、翌朝、ちょうど長与の先のほうに洗^{あらいきり}切っていうところに親が疎開しとったんですよ。んでそこから師範生が長与国民学校にいっぱい負傷してきてるぞっていうことでびっくりして探しにきたんですね、いっぺん、目と目が合うんですけどね、友達も築城はここに寝てますよって教えてくれてるんですけど、いっぺん顔と顔と合って、あーよかった助かったと思ったんですけど、おやじがこれは違うって言って、もうそれほど顔が違ってしまっていたんですね。それから1時間ぐらい経ってからこれは困ったなあと思っとならまたやってきて、やっぱりおまえだったって言って、そしてすぐリアカーに載せてもらって疎開先の自分の家まで帰った。

兄が、今も病院してるんですけど、兄が当時医学生だったんですよ。兄がその日具合が悪くて学校休んでいるんですね、それで助かった。学校に行っておったら兄もやられとった。兄がもうすぐおやじと一緒にやってきて、すぐ治療して家に連れて帰ってからまた茅を引いて、その上に寝せてあとはもう兄がつきっきりでずっと治療して。そのとき兄から（包帯を）はがされるときに、もう本当に死んだほうがましだと思うぐらい痛かったですね。2か月、やけどが治るのが2か月ぐらい。あの治った治ったって言い出したときにぶくぶくってふくれだしたんですよ、その前はこんなケロイドになるとは思わんやったですよ。ふくれだしてからどうしたんだろうと思ったんだけど、ケロイドになって。病気そのものはですね、自分の家に帰ってから下痢をし出して、それから高熱。あと顔の斑点がでたらもう死ぬぞってというようなことをね、やっぱり近所にも被爆した人が親戚を頼って逃げてきて寝とったんですよ。そうしたら次から次へと一週間二週間経つうちに死んで行って。んで、そういう人たちのそういう現象もあったんでしょ、斑点ができたら死ぬと。僕ももうすぐ斑点ができるだろう、内出血みたいなね。そう思っとならやっぱり2か月ぐらいたってから治り出したんですね。若かったせいがあったんじゃないかなと思うんですけども。自分でもあれよあれよと思う間に治りだして、熱もひいて下痢もしないようになって食欲も少しずつ出てきてですね。それでもあと1か月ぐらいは動きはとれんやったんですけど」

記者 「被爆体験を話そうと思ったきっかけは？」

築城さん 「あのですね、学校の教師になったすぐのころは生徒もみんな被爆者だったんですよ。家庭訪問したらその家族も被爆者ですよ、もうみんな被爆体験を持っている。よく生徒とも同等な立場でいろんなそんな時の様子をお互いの話をしたりしよった。しかし、

そうですね、10年15年ぐらい経ったところから、はっと気づいてみるともう生徒は被爆者じゃなくなっておったし。ちょうど15年ぐらい経ったところかな、あの広島でやっぱり教師が積極的に話をするようにしようという、そういう運動が起こりましてね。んで、石田先生っていうもう亡くなったんですけどもね。石田先生がちょっと長崎もそういうことをしないかって、一緒に委員長と2人で一緒に広島に行ってんで、石田先生と話をして、これは長崎もそういう運動をする必要があるなっていう。それでそういう必要を感じた被爆者の教師が集まって、被爆教師の会、広島でもつくって、つくったらどうかって誘われた。んで、長崎でも作ろうっていうので作ったりして。最初はまあどういふふうに話したらいいか、どんなふうにしたらいいかよくわからんやったけども、おたがいに研究しあいながら、少しずつ少しずつ話をしたり、そのうちに修学旅行がきて話をしてくれんかって教職員組合なんか申し出があって、今の市の継承部会はあれはね、80年代ぐらいにできましたもんね。僕らは70年代はじめごろそういうことを。最初は修学旅行生に話しをしたり、原爆記念日に話をしたり時々生徒にそういう話をしとったんですよ。最初は1人で行って話をするのが気後れがして何人かで行って、お互いに話を、1人の人が話をするのを聞いて、自分の話をしているのを聞いてもらって、ていうふうなことで研究しあいながら。

やっぱり原爆、あの悲惨な原爆がだんだん遠ざかってきてその、生徒の中にも被爆者じゃなくなってくるっていう事態が起こると、これはしかし忘れ、お互いに忘れないようにせないかん一っていう気持ちが起こってきたんです。それがやっぱり70年代ぐらいつと少しずつあって、70年代後半、80年代になってその継承部会ができた時にはすぐ入って、とにかく組織的にせないかんなど」

記者 「核兵器が今も2万以上あることについて」

築城さん 「やっぱりね、いろんなことを言うですね、核があるから平和がある、戦争がいわゆる世界戦争のような戦争は起こらないんだと、しかし核があるということはいよいよ自分の国が減びるとなればやっぱり絶対使いますからね、先制攻撃はしないといくら言っても。核があるということはいつかは使うということですから。これ使われたら、もう今のように発達してくると何万発もあるし、また1発の威力もものすごく大きいとかもうそういうふうな状態になると、もう地球がほろびる。やっぱり最終的に地球の平和を確保するためにはもう核そのものをなくさなくてはいけない。そのためにはやっぱり理解をしてもらわないかんですね。理解してもらうためにはやっぱり長崎や広島の現状をみんなに知ってもらわないかん。そういうふうな考えになってきて」

記者 「被爆者としての願い、どうしたら平和な世界を築けるとお思いますか？」

築城さん 「もう今の世界の情勢を見てね、時々あーもうこれはぜったいならんのではないかなと、そしたらもう地球が減びるっていうのはもう見定められてるんじゃないかな、なんて思ったりしてるんですけど、やっぱりそういう捨て鉢になっちゃいけないと思うし。なんとかして核兵器というものの現状を、核兵器を持っていて降伏したにしても、今

度はむこうから攻撃を受けて、もうとにかくものすごい痛手をみんなこうむるわけですから、核兵器の残酷さ、すごさっていうのをもっともっと世界の人にみんなに知ってもらわないといけない。ただそういうことを願っているだけです」

※やけどした手足を見せる築城さん。

2013年1月19日 長崎市ダイヤランドの自宅にて
インタビュー担当

NHK長崎放送局 記者 山田奈々